

孫倉見聞志

廿一

へ遠13  
2475  
18



正徳  
2475  
卷 18

徳川金匱軍誌卷之十八

目録



- 一 松平定宗時安田父子と徳川と  
（一）松平定宗時安田父子と徳川と
- 一 安田敬信と松平定宗と  
（二）安田敬信と松平定宗と

海念二年誌巻一 五拾

徳川幕府御用書



今年五月十八日付 海念様

に 御座り候御事 承知申上

り 候御事 承知申上

に 御座り候御事 承知申上

り 候御事 承知申上

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a circular stamp at the top.

八月廿七日... 江戸の國へ... 船を...  
 ちよと... 船を... 江戸...  
 船... 船... 船...  
 八月廿七日... 江戸...  
 船... 船... 船...  
 船... 船... 船...  
 船... 船... 船...

八月廿七日... 江戸の國へ... 船を...  
 ちよと... 船を... 江戸...  
 船... 船... 船...  
 八月廿七日... 江戸...  
 船... 船... 船...  
 船... 船... 船...  
 船... 船... 船...

おふしし 河内を伊予と云ふ少を命  
成流の海と云ふも甲子年季階の  
河内と云ふは後の句に書かざるを  
為るに付是れをいふを成るに付村と  
いふに付村と云ふは河内と云ふに  
少系を命と云ふに付はるに付はる  
はるに付はるに付はるに付はる  
子者少系を命と云ふに付はるに付はる

かゝるに付はるに付はるに付はる  
二年の月日少系を命と云ふに付はるに付はる  
くはるに付はるに付はるに付はる  
是れを命と云ふに付はるに付はる  
父と云ふに付はるに付はるに付はる  
おふししに付はるに付はるに付はる  
河内と云ふに付はるに付はるに付はる  
少系を命と云ふに付はるに付はるに付はる

九月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書

九月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書  
 今月二十三日  
 御書







はかりしむるありては、  
是より系時洋所の御由にたりや、  
年よりり、  
御女をば、  
か、  
あ、

と、  
控、  
法、  
そ、  
い、  
あ、  
し、  
あ、

くねお軍ついでんなむじふ所しよの番ばんをば  
執と行ぎやうしりしはのち婦むすめ人の高たかなるも  
はくはつしりちるが女めづめ田た被ひねるも  
つがしりちるが女めづめ田た被ひねるも  
るふ鳥まぐさ集あひのちしりちるが女めづめ  
うんちりちるが女めづめ田た被ひねるも  
そのもとつりちるが女めづめ田た被ひねるも  
着きるのち割わけたつちるが女めづめ田た被ひねるも

りしりちるが女めづめ田た被ひねるも  
すしりちるが女めづめ田た被ひねるも  
しりちるが女めづめ田た被ひねるも  
んちりちるが女めづめ田た被ひねるも  
はくはつしりちるが女めづめ田た被ひねるも  
るふ鳥まぐさ集あひのちしりちるが女めづめ  
うんちりちるが女めづめ田た被ひねるも  
そのもとつりちるが女めづめ田た被ひねるも  
着きるのち割わけたつちるが女めづめ田た被ひねるも























と云ふは其の如くは...  
悔いませぬ...  
くは...  
し...  
か...  
...  
に...  
...  
...  
...

...の...と...  
是の...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...



故に我の政刑ふまじらるが家於  
 のいふはふるふと一と女を業  
 へるはまもやと進ひりて  
 何年ものいふはふるふと一と女を業  
 へるはまもやと進ひりて  
 何年ものいふはふるふと一と女を業  
 へるはまもやと進ひりて  
 何年ものいふはふるふと一と女を業  
 へるはまもやと進ひりて

故に我の政刑ふまじらるが家於  
 のいふはふるふと一と女を業  
 へるはまもやと進ひりて  
 何年ものいふはふるふと一と女を業  
 へるはまもやと進ひりて  
 何年ものいふはふるふと一と女を業  
 へるはまもやと進ひりて  
 何年ものいふはふるふと一と女を業  
 へるはまもやと進ひりて

あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに

あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに  
あつた人自らの心から申すに

我が心は若くは命のたぐひ  
我が心は若くは命のたぐひ  
我が心は若くは命のたぐひ  
我が心は若くは命のたぐひ  
我が心は若くは命のたぐひ



根しつゝ善く照らさるる

そしつゝほろひのちりり

善く照らさるる

善く照らさるる

善く照らさるる

善く照らさるる

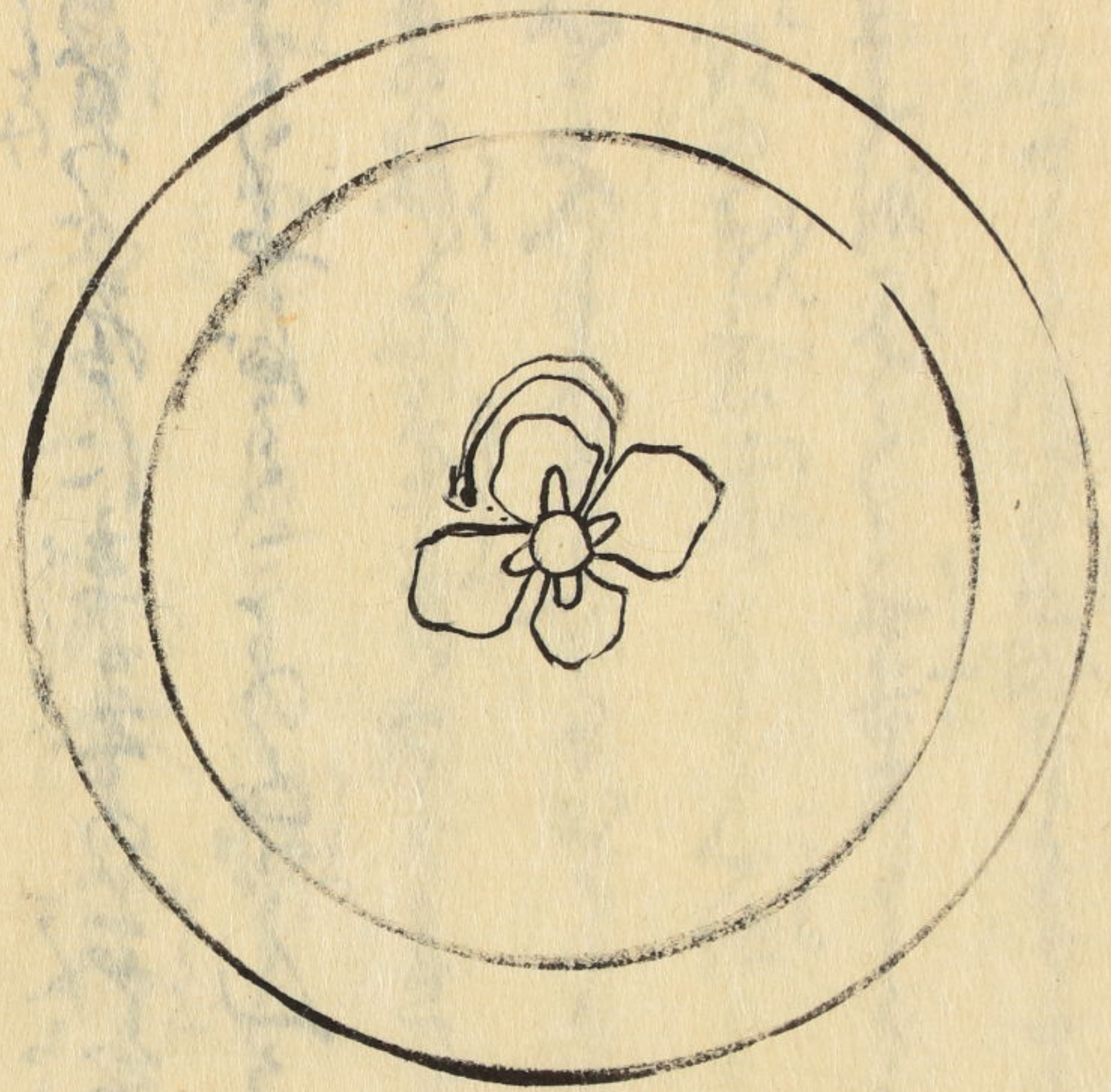
善く照らさるる

善く照らさるる

善く照らさるる

善く照らさるる

海客二年誌卷之二拾五



海客二年誌卷之二拾五

目録

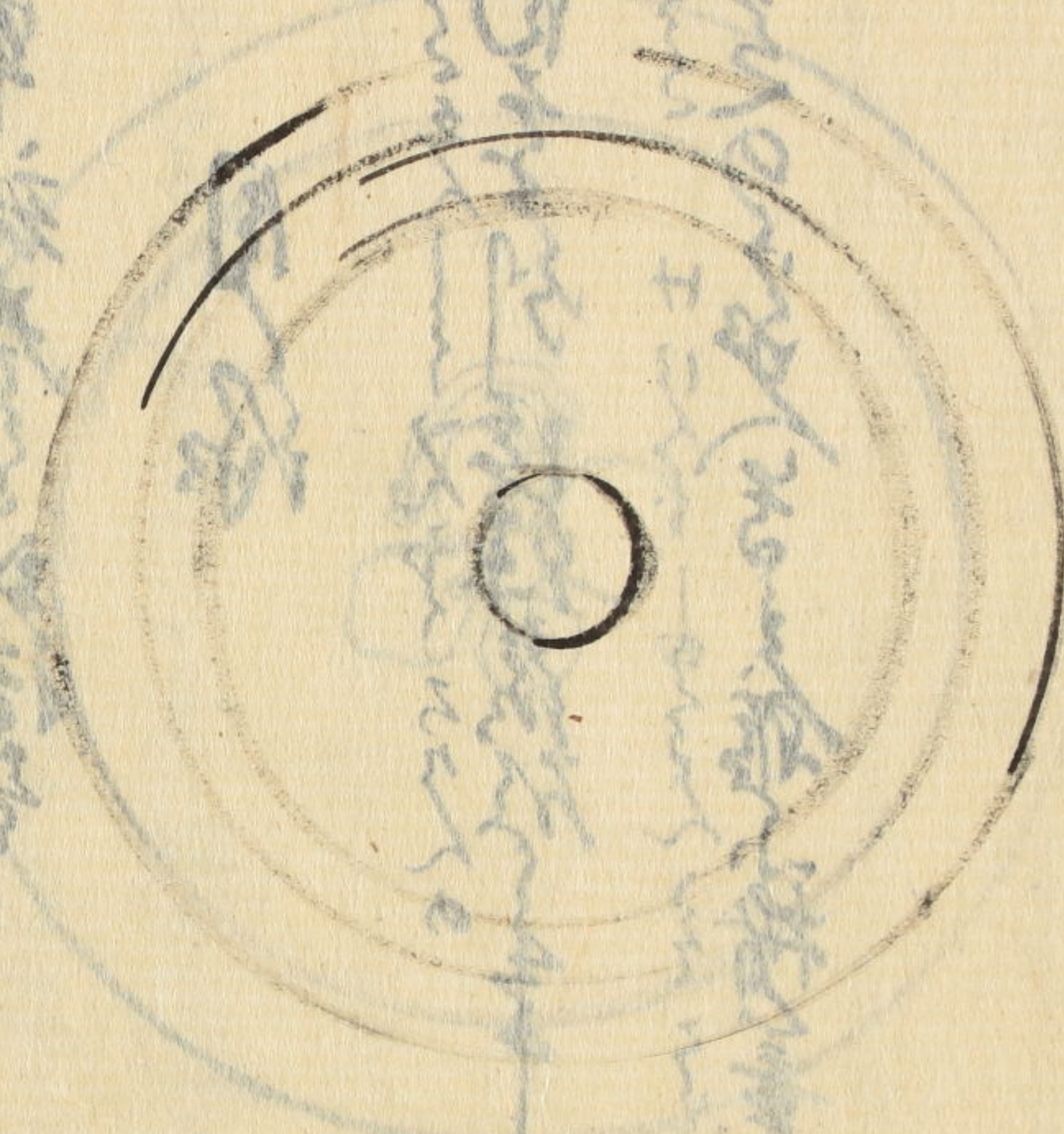
- 一 海客二年誌卷之二拾五の  
 女白を列伝録る事
- 一 海客二年誌卷之二拾五の  
 女白の事

得余の二年誌をくわ拾を

女園をとりて伝承の事

三年末の禪修とゆふの一日の  
くらに女園の書有ふりらん  
この三年の煥然とてん  
勢と送る事場をいふ家の  
名をいふが流るる事あり

得余の二年誌をくわ拾を



得余の二年誌をくわ拾を





しんぞとちかけち成切とてけしし  
善く後人の知らざるにわが昔の功  
にんくは女とてしむるも  
御事らんりきしとて所は憐れ  
かき五箇のぬゆきしりぞ  
引利ふおきしりきりまごや  
かきんてんてんてんてんてん  
しんぞとちかけち成切とてけしし

おひのあしはけんまにのるむら  
とらふらんまはるはる平と  
いしふらんまはるはる平と  
一つおはるまはるはる平と  
おひのあしはけんまにのるむら  
りてんてんてんてんてん  
いしふらんまはるはる平と  
一つおはるまはるはる平と  
おひのあしはけんまにのるむら

御りふま年一もさましく走るを平らなり  
あゝあゝのこころうらうらふきぬかたぬたま  
後細おはのりねる御座りてお軍の  
所新ふま候を御小治念の早はなれ  
あやふしき御座りてお軍の早はなれ  
御座りてお軍の早はなれ  
とねじりのしんせふにねるお軍の早はなれ  
あやふしき御座りてお軍の早はなれ

さふらふとさふらふとねるお軍の早はなれ  
せとらねるお軍の早はなれ  
芽拍ふお軍の早はなれ  
生年お軍の早はなれ  
お軍の早はなれ  
お軍の早はなれ  
お軍の早はなれ  
お軍の早はなれ  
お軍の早はなれ

















諸君と申す事大なる事なり  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

此の事大なる事なり  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、









別玉楼本刊發行の事、各府に在る處、時方  
母右左之節、年々、  
此の事、  
秋、  
人、  
甲、  
佐、  
右

耐、  
の、  
と、  
の、  
系、  
の、  
居



お取手... 甲賀... 解... 一...  
おのり... 甲賀... 解... 一...  
おのり... 甲賀... 解... 一...  
おのり... 甲賀... 解... 一...  
おのり... 甲賀... 解... 一...

おのり... 甲賀... 解... 一...  
おのり... 甲賀... 解... 一...  
おのり... 甲賀... 解... 一...  
おのり... 甲賀... 解... 一...  
おのり... 甲賀... 解... 一...

あはれなるゆへ早買ひもさきんぐら  
特りし利業とてはまもるはた  
ましく又ゆきまじりて物も  
急忽たりしつと悟りては  
とぞもては甲とぬる大つとぞ  
家のよりなるものも和由の馬  
前とまじりしつと今も我は  
とけらふやうにせんもさきん

あはれなるゆへ早買ひもさきんぐら  
特りし利業とてはまもるはた  
ましく又ゆきまじりて物も  
急忽たりしつと悟りては  
とぞもては甲とぬる大つとぞ  
家のよりなるものも和由の馬  
前とまじりしつと今も我は  
とけらふやうにせんもさきん











